

19999星 物語

もの

がたり

作:近藤せいけん



k 9999星 物語 第101回相模川のほとり 日本そば 会津屋

コンさん、大ちゃん、クーマさん、ヤーさん、ワハア～ ファ！のコイトさんはいつもの、日本そば屋 会津屋に行った。ここのそばは、会津磐梯山、山麓の高原で採れる日本そばを使用している。それを石抜き、磨きをかけ石臼挽き、ロール挽きし、本格的なそばをだすと、人気のある店である。顔を出すと、店主の鉄ちゃんが「いらっしゃ～い ご新規様！ 五名様～ご来店～」

若い者が「いらっしゃい！ 喜んで！」

一階は満席にいつもの様に、混んでいる。コンさん達は常連様用の二階の座敷に案内される。ここからの眺めはすばらしい～大河 相模川の流れが一望に出来る。あゆつりのつり人が見える。水もにキラキラと陽炎がたち、涼風を運んでくる。おりしも、にわか雨が雨音をたたく。いちじんの気持ちの良い風が座敷に流れる。

クーマさん 「生、生！ 早く！・・・」

ヤー 「のどが渴いて～死にそう～いそいで！」

コンさん 「ビール 生～ いいね～」

ワハア～ ファ！のコイトさん 「いけ～いけ～ドンドン！・・・」

生ビールが運ばれてくる。おつまみは 朝取りのエダマメ 塩味がチョピリ利いた何ともいえない 風味がある。エダマメをつまみながらジョツキをほす。至福の時である。

ワハア～ ファ！のコイトさん 「オカワリ！ うまい！うまい！」

コンさん 「私もオカワリ！ うまい！」

そこえ 鉄ちゃんの奥さんの ユカさん 「お待ちさま！ おそばをお持ちしました～」
「会津屋名物 あげ天 そばですよ！」

てんぷらはエビ、相模湾でとれたキス、イカ、朝どりのナス、シソ、が山盛りに盛り付けられている。そしてこだわりの天つゆ、静岡の天城産の天然わさび、地場産の小ねぎ、瀬戸物のおろしがね。全てが会津屋でなければというこだわり。

コンさん 「 会津屋のそば、天下一品だね！ 」

大ちゃん 「 会津屋のそばだけは～何杯もいけるね～・・・」

クーマさん 「 そば、よし～てんぷら、よし～ ビール、よ～し、それに ユカ 女将 さらによし～ 」

ヤーさん 「 このわさび～ ききますね！ つーんときましたよ～天然物は違いますね！ 」

ワハア～ ファ！のコイトさん 「 ワハア～ ファ！ すべてよし～ワハア～ ファ！ 」

大ちゃん 「そいいえば～ 店の増築のはなし？ どうなったの～」

ワハア～ ファ！のコイトさん 「 おまかせあれ！ おまかせあれ～大船に乗った気持ちで～この 男 コイトにおまかせあれ！ワハア～ ファ！ 」

相模川のほとり 日本そばの会津屋 いつもの連中の笑い声がいつまでも、続いています。

タクマラカン 1, 000年博士、インシュタイン博士、おとめ姫、オリ姫、シーワそして
コン隊長が集まった。

1, 000年博士 「 やっと～ (ある物) の原型は完成した。」

インシュタイン博士 「 しかし～ これでは 小さいすぎる～ 」

コン隊長 「 (ある物) とはどこにあるのですか？ 」

1, 000年博士 「 目の前だよ～ アハアハ～」

おとめ姫 「 人類である コン隊長には見えないのです～」

1, 000年博士 「 このメガネをかけなさい！ 」

コン隊長 「 ワア～アア～ こんなに大きい 円盤 ！ 驚いた！～」

そこには巨大な銀色の円盤がそびえ 立っていた。

コン隊長 「 これでも小さいのですか？・・・」

1, 000年博士 「 これでも小さい！ 宇宙空間に置くのには小さすぎる。」

コン隊長 「 こんな大きな物を～どうやって～運ぶのですか？ 」

1, 000年博士 「 そこだ！ まずは～ インシュタイン博士のロケットで打ち上げ～宇
宙空間で数十倍に伸ばす～その大変むずかしい～技術が残念ながら～我々にはない！」

インシュタイン博士 「 人類の力で打ち上げたと～しないと～人間社会は信じないし～ 協力
してくれない～やっかいな種だ～」

1, 000年博士 「 コン隊長～あなたに頼みたい！ 星の王子様に力を貸してもらいたい
！ 」 「 あなたは星の王子様と話ができる、唯一の人ダ！ 」

コン隊長 「 はたして？ 王子様は力を貸していただけるか～・・・」

オリ姫 「 あなたしか、それはできない！ 」

おとめ姫 「 コン隊長！ ぜひ～お願いします！」

コン隊長 「 わかりました～ やっていきましょう！・・・」

コン隊長は星の王子様から いただいた指輪をさわり、王子様に心の通信を送った。すぐ王子様から返事が返ってきた。

コン隊長 「 お力をお貸し下さい！ 王子様～」 「 今、大事な局面にあります～ われわれの文明では解決できない 科学を教えてください！」

星の王子様 「 あなたがたの 私を呼んだ理由はわかっています～よくここまできましたね～K9999星のこの重大な環境破壊の危機～1,000年博士達が完成させた その円盤 おそらく地球を救うと思います。 」

「 さて～私は天上界の管理星 私が直接 教えることは あなたがたの星の運命を変えてしまいます。 それは出来ません！」

「しかし～それを知っている者を教える事は出来ます！ あなた方で見つけなさい！」

コン隊長 「 その方はどこに～いますか？・・・」

星の王子様 「 もうすぐ・・・この銀河系宇宙を通るはずです～」

コン隊長 「 エ～エ～大宇宙からですか～」

星の王子様 「 そうです～ あなたがたの心を集め～念じなさい！ そうすれば～必ず～届くはずです！ 」

コン隊長 「 その方は何と～おっしゃる方ですか？・・・」

星の王子様 「 その者の名は～ 永遠の旅ビト マホロバ～です～ 」

コン隊長 「 永遠の旅ビト ～マホロバ！ですね！・・・」

コン隊長、1,000年博士、インシュタイン博士、おとめ姫、オリ姫、シーワ 皆で心の通信を何度もこころみた。しかし何の変化も現れなかった。砂漠の暑い太陽も沈み始めた。

ツバサ 「何か音がします!・・・」

シーワ 「エ～・・・ そうだな～何か～音が～こちらに向かってくる!」

おとめ姫 「そうですね～ 不思議な音が～少し～聞こえます～」

コン隊長 「何も 聞こえないが?・・・」

オリ姫 「確かに! 何かが? こちらに向かっていきます～」

1,000年博士 「確かに～聞こえる～あれは～馬頭琴(ばとうきん)のように～聞こえるが?」

おとめ姫 「もしかしたら～ 遊牧の民では～ないでしょうか?」

シーワ 「あれは～誰かが～弾いている 音です?」

だんだんと音は近づいて来る。誰かが弾く～音楽だと～はっきり解る。それは哀調のおびた美しい～音楽であった。

シーワ 「あれは～・・・」

沈みゆく砂丘の上～白い馬にまたがった～馬頭琴をかなでる、白い長い～ヒゲ 白い服 黒色の馬頭琴 そして 白馬 まるで一枚の絵のようである。

コン隊長 「あの白馬～ ツバサがある～・・・」 「天馬だ!・・・」

コン隊長 「もしや～あなた様は～マホロバ様ではないですか?・・・」

白い 天馬に乗った 白ヒゲの旅ビトは静かにこちらを見ている。そして次々と旅ビトと同じ分身がやって来ては白い旅ビトと合体する。まるで何かを調べているかのようだ。しばらくそれが続き、やがて白い旅ビトが近づいてくる。そして、天馬より降り、コン隊長の前に来た。

コン隊長 「 マホロバ様ですか～・・・」

おとめ姫 「 永遠の旅ビト マホロバ様ですね！・・・」

旅ビト 「 私を呼んだのは～あなた方ですか～」 「 私は マホロバです～」

コン隊長 「 マホロバ様～K9999星（地球）は今 危機に陥っています！その解決策として（太陽とこの星の間に～ある物を置き）永遠のクリーン エネルギーとしてその力を導きたいと思っています。しかし最後の段階で行き詰っています。」 「 どうか～お力をお貸しください！ お願いいたします。 」

オリ姫 「 私の住む～北極も氷が溶け～日一日 環境は悪化しています！どうか！ お力をお貸し下さい！ 」

シーワ 「 我がシーワ王国も気候の急激な変化により～温度が上がり～あらゆる生き物が生命の危機に直面しています！」

おとめ姫 「 この砂漠もだんだん～と拡大され～ますます温度が上がり、生き物が住めなく、なりつつあります！」

1,000年博士 「 私達の科学水準では（ある物）の原型は出来ましたが、それを、宇宙空間に拡大し、正確に太陽との中間点まで運ぶ技術はありません。」

インシュタイン博士 「 私の所属する国際宇宙研究所で小さな原型を打ち上げはできますが、さらに宇宙空間で数十倍に拡大させ、正確に太陽との中間点まで運ぶ技術は持っていません！」

マホロバ 「 あなた方の私を呼んだ～理由は解りました～」 「 この星がおちいつている、危機もほぼ～私の分身の調べで理解しました～」

マホロバ 「 この星をここまで悪化させた～人類～まだ気づいていないのではないですか？ 」

コン隊長 「 …… 」

マホロバ 「 K9999星の一つの種 人類は愚かである～自分の星を壊してまで、未来はないのに～豊かさの為に、他の多くの種を滅亡させて～自分の種でけよければいい～というのは～この宇宙の法則に反する。」

「 私の見るところ、人類がこの100年に行なった、この星に与えた、進歩、文明という名の科学的変革は、ただ、人類だけの便利さ、豊かさ、幸せの追求で、他の多くの生き物、とりわけこの星に対して、あらゆる被害を与え、今だ与え続けている。」

コン隊長 「 この地球を～元の美しい～地球に戻す事はできますか？・・・」

マホロバ 「 あなた方～人類次第だ～ 皆の意識が変わらなければ～もっと悪い事がたくさん起きるだろう～」

コン隊長 「 マホロバ様 あなた様はいろんな星を見てこられたのですね～」

マホロバ 「 エエ～そうだよ～ 多くの星座を旅してきたよ～」

コン隊長 「 我々の住む地球と同じような星はありますか？」

マホロバ 「 今の人類である～コンさんには理解するのは難しいかも～でも～答えよう～あるよ～ たくさんあるよ～」

コンさん 「 この地球と同じような自然、生き物がまた我々人類に似た種もいますか？」

マホロバ 「 いるよ～ 星によつて進化の度合いは違うけど～たくさんの生き物があるよ～」

コン隊長 「 ワア～ワア～・・・信じられない～・・・」

k 9999星 物語

第108回 永遠の旅ビト ～マホロバ4

マホロバ 「この星の人類が行なった、また今だ 行い続けている、この星へ対する破壊行為は日一日、拡大しこの星を滅亡に近づけている。愚かなり、人類～ この星の樹木は人間のよう毎日、メンテナンスを必要としない～樹木と人間は互いに絡みあって、樹木は空中の二酸化炭素を吸収し、気体の中の炭素を利用し、炭水化物を作って成長する。一方 酸素は樹木から放出される。人間は生きる為に、酸素が必要だ。樹木が大気中にある二酸化炭素を酸素に変えてくれないと、人間は生きられない。」

コンさん 「その樹木を人間は大規模に開発という名で～痛めつけている～・・・」

マホロバ 「そう～私が調べたところ この星の人類は自分の都合、利益のためこの地球の大気のバランスを維持するため、必要な大アマゾンの熱帯雨林を、何エーカ～何千エーカと森を切り倒している。」 「この酸素工場をつくるのには この星の時間だ2,000年～3,000年かかるのに～その他 あっち、こっちの森林を切り倒している～」

コンさん 「ここ十年ぐらいの変化は急激なものがあります～」

マホロバ 「またこの星の大気を守ってくれている オゾン層の破壊がすすんでいる～ 技術の進歩が 人類はこの星の自然のバランスを越えてしまっている～」

「人類は科学技術の水準をあげたのはいいが～特に医学分野で 恐ろしい耐性を持ったウイルスを生みだしてしまった。」

コンさん 「このまま行くとどうなりますか？・・・」

マホロバ 「解っているだろう～ 滅亡しかないよ～」

「この星は銀河系宇宙の中では最も美しい～星だ！ 急がないといけないよ～あと残された時間は少ないよ～」

コンさん 「お力をお貸してください！」

マホロバ 「 私は旅する者～それも永遠に～それが私の生きがい～私の宿命～他のものに喜びを与え、幸せに～するのが～私の喜び～」

「 やっていきましょう！ この美しい～星のために～この星を滅ばさないために～そして～あなた方のために～」

コン隊長 「 お願いいたします！ ありがとうございます～」

おとめ姫 「 何から始めますか？」

マホロバ 「 旅してきた天馬にまずおいしい水を飲ましてください～そして私にはおいしいこの星の果物を食べさせて下さい～」

おとめ姫 「 かしこまりました～」

1,000年博士 インシュタイン博士は現在の研究の成果、行き詰っている問題点をこと細かに話した。マホロバは静かに聴いている。そして長い説明が終わる。マホロバは話を始めた。

マホロバ 「 太陽と地球の間に置く円盤は、もっと改良が必要です～まずそこからはじめましょう！」 「 そしてコン隊長～あなたの仕事が大事になります～」

コン隊長 「 何なりと～おっしゃつて下さい！ 全力でやります！」

マホロバ 「 人類に この未来のエネルギーを理解させ～仲良く～公平に～しかも安全に使う システム作りを～コン隊長～あなたがやってください！あなたなら、それが出来る！」 「 私は1,000年博士、インシュタン博士と協力してこの円盤を完成させましょう！」

コン隊長 「 エ～エ～・・・どう～やって～・・・」

コン隊長はこの重大な地球を救う大事業を各国の人々に理解させる任務を与えられた。どうしたら良いか？皆目 解らなかった。そこにインシュタイン博士が助け舟を出した。

インシュタイン博士 「 私は国連の機関にいます。私が国連のトップ 事務総長を紹介いたしましょう。」

コン隊長 「 エ～エ～あの国連事務総長ですか！・・・」

インシュタイン博士 「 そうです！ミスター ジャン 事務総長です！ 」

コン隊長 「 身がふるえる」 「 ダイジョウブかな～ 」

コン隊長 「 一緒にいきましょう！ 」

コン隊長 「 はい お願いいたします」

コン隊長 とインシュタイン博士は連れ立って、アメリカ合衆国のニューヨーク・マンハッタンにある国際連合の本部に到着した。

ミスター ジャン 事務総長に面会し、協力を得るためである。

インシュタイン博士が先導して、ジャン 事務総長が待つオフィスに入った。

しばらくすると、ミスター ジャン 事務総長が現れ、ニコやかに握手を交わした。

インシュタイン博士 「 ジャン 事務総長 ご紹介いたします。この方が先日 お話いたしました、コン隊長です」

ジャン 事務総長 「 ようこそ いらしあいました。歓迎いたします。」

コン隊長 「 お目にかかれて、大変 光栄です」